

英国中等教育向け日本語リソース開発プロジェクト

来嶋洋美・村田春文

〔キーワード〕 英国、中等教育、支援事業、教材開発プロジェクト、「力 CHIKARA 」リソース

〔要旨〕

英国はヨーロッパの中でも、中等教育の学習者の割合がひじょうに高い国である。各校ではGCSEと呼ばれる中等教育修了資格試験を目標に日本語教育を行っている。しかし、GCSE日本語コースの教科書はなく、カリキュラムや教材は学校や教師によって異なり、多様である。そのため、国際交流基金ロンドン事務所にとっては当地の日本語教育の典型が把握しにくく、支援内容の策定に苦慮してきた。このような現状を改善するために、ロンドン事務所では日本語リソース「力 CHIKARA 」開発プロジェクトを立ち上げた。GCSEの試験シラバスをカリキュラム・教材作成用のシラバスに再構成し、それをもとに300ファイル以上からなる教材群を開発、ウェブサイト上で公開、無料配信している。また、このリソースと関連させた内容での教師研修を企画しているところである。

1. はじめに

国際交流基金ロンドン事務所の日本語教育部門は1997年に設置され、「ロンドン日本語センター」¹⁾(以下、JFLLC: The Japan Foundation London Language Centre)として知られている。ここでは、英国独特の日本語教育ニーズに応えるべく支援事業を行っているが、学習者数の3分の2を占める中等教育分野に対しては、特に重点を置いてきた。英国の状況は、日本語教育が大規模に行われているアジア・大洋州諸国とは異なる。例えば、インドネシア、タイ、マレーシア等においては、各国基金事務所と当該国の教育省との協力関係の中で、中等教育のための教科書や教材の開発事業が展開されている²⁾が、英国においては特にそのようなことはない。以下に述べる英国の中等教育向け日本語リソース「力 CHIKARA 」開発プロジェクトは、JFLLCが英国の状況に合わせて独自に開発した教育方法を提案するというもので、筆者らはロンドン日本語センター主幹(村田)、日本語教育アドバイザー(来嶋)としてこのプロジェクトに取り組んでいる。本論は、このプロジェクトの企画・実施の状況を報告するものである。

2. プロジェクトの背景

まず、プロジェクトの背景となる英国中等教育における日本語教育とJFLLCの支援事業を振り返ることとする。

2.1 英国の中等教育における日本語教育

2.1.1 学習者・教師・機関・学習目標

国際交流基金2003年日本語教育機関調査によると、英国の日本語学習者数は約16,000人で、そのうち中等教育⁽³⁾については学習者数9,600人、教員210人となっている。中等教育の日本語学習者は、英国教育制度の学年で言えば7年生から11年生(11~15歳)にあたる。母語、母文化は多様であるが、非漢字系の学習者が多い。日本語学習を始めた理由としては、マンガやアニメ、武道などが好きだから、日本語は珍しいからということがよく挙げられる。教師の約60%は日本語母語話者ではない。日本語母語話者の教師のほとんどは、英国の教員資格を有さず、パートタイム教師として勤務している場合が多い。また、中等教育機関(256校)はロンドンを中心に全国に分布している。学校種は公立校も私立校もあるが、特徴としては、Language Specialist Collegeと呼ばれるいわゆる外国語強化校の約半数(100校)が、第2外国語として日本語を導入している点である⁽⁴⁾。

英国では中等教育の最終学年(Year11)で、GCSE(General Certificate of Secondary Education)という中等教育修了資格試験を受けることになっている。この資格試験は、就職や進学などの際に影響を及ぼす重要なものである。日本語もその科目に含まれており、ほとんどの学校でこのGCSEを目標に日本語授業を進めている。

2.1.2 中等教育の日本語教育現場の問題

GCSEを主目的とした日本語指導に目を向けると、現場での様々な困難点が浮かび上がってくる。まず、教師はGCSEの試験シラバス(*Edexcel GCSE Japanese Specification*)をカリキュラム化する必要がある。試験シラバスは、トピック、漢字、語彙、文法・文型など学習項目を列挙して出題範囲を示すものであるから、実際にこれを指導するには、いつ、何を、どのようにして指導するかということを決めなければならない。フランス語やドイツ語、そして中国語などの場合は、GCSE向け教科書が出版されているので、その教科書を利用することでカリキュラム化作業のほとんどの部分は補える。ところが、日本語にはGCSE向け教科書がないため、多くの教師がオーストラリアの中等教育向け日本語教科書などを参考にしてカリキュラムを作っている。教材も、数種類の教科書から一部を抜粋したり、必要に応じて自作の教材を加えたりしているが、教材不足の声が常に現場から聞こえてくる。教材の作成は、非日本語母語話者の教師にとっては日本語面で、日本語母語話者であっても経験の浅い教師にとっては作成手法において、不安が残るものと思われる。

英国中等教育向け日本語リソース開発プロジェクト

このように、学校や教師は個別にカリキュラム作成と教材の作成及び収集に取り組まなければならないが、これは知識と経験を要するたいへんな作業であり、整ったカリキュラムを提示できる教育機関は一部に限られている。また、そのようなカリキュラムは当該校の知的財産であり、他校と共有することはあまりないようである。

2.2 JFLLCの中等教育支援事業

2.2.1 主な支援事業

ロンドン事務所が近年行ってきた主な中等教育日本語支援事業を、目的別に以下に挙げる。

表1 ロンドン事務所による主な中等教育支援事業

目 的	内 容
日本語教師支援：日本語力向上	研修会Refresher Courseの実施（年1回5日間）
日本語教師支援：教材提供	ニュースレター『まど』のGCSE/GCE教材（年3回発行） GCSE資料、漢字カード、語彙・漢字などの練習問題（Web） 教師から投稿された教材（Web）
日本語普及	外国語教科主任等を対象としたHead Start（年1回） 日本語体験の出張授業Stepping Out（随時）
日本語学習奨励	中等教育のためのスピーチコンテスト（年1回 共催事業）
その他試験関係	Edexcel GCSE Day, Edexcel GCE A level Day（各年1回）

特にGCSEとの関連について述べると、まず教師支援事業のうち、Refresher Courseは、日本語を母語としない教師の日本語力向上を主目的に実施している研修会であるが、その日本語授業ではGCSE日本語のトピックや文型等を取り入れて、各参加者が自分の授業のヒントにもなるようにしている。教材については、ニュースレター『まど』（年3回発行）で2ページの紙面でGCSEまたはGCE（General Certificate of Education）⁵⁾向けの教材を執筆、提供していた⁶⁾。ウェブサイトでは、ロンドン事務所日本語アドバイザー⁷⁾がこれまでに作成してきたGCSE日本語の教師用資料（市販教科書の学習項目とGCSE日本語項目の対照表など）や漢字カード、また教師が投稿した自作教材などがいくつか掲載されている。また日本語普及目的であるHead Startは、学校内でカリキュラム導入の判断を下すポストにある外国語教科主任や学校長を対象に、日本語・日本文化と様々な教育情報を提供するプログラムであるが、ここでは日本語が生徒の資格取得になるということが重要なポイントになるので、GCSEをはじめ日本語で資格認定を受けられる英国の各種試験の情報を提供している。Edexcel GCSE DayとEdexcel GCE A level Dayは、試験開発・実施機関であるEdexcelに協力してロンドン事務所で開催している研修会である。試験結果の分析や記述式問題の採点方法のワークショップなどがその内容となっている。講師はEdexcelから派遣されている。

2.2.2 JFLLCの問題

さて、中等教育支援に力点を置いているJFLLCにとって、具体的な支援策を展開する上で障害は、2.1.2で述べたように、英国全国の学校で共有されているGCSE日本語の標準カリキュラムや教科書がないということである。つまり、各校で、何をどのように教えているのかという基本情報が不明瞭で、日本語授業の典型がつかめないために、研修や教材の内容設定に制約が出てくるのである。例えば、研修の日本語授業で取り上げるトピック内容や言語項目は参加者全員が学校でも教えているものを選びたいと考えても、適当なものが見当たらない場合がある。教材作成においてはもっと不都合が生じる。授業で何をどう教えるのかがわからない状況にあって、提供できる教材は受験学年のための総仕上げ用練習問題や、トピックに関連した語彙・表現・漢字等の教材、GCSE項目と日本語能力試験や市販教科書の項目を対照した教師用資料などに限られる。しかし、学校教育における外国語学習は一時間一時間の授業の積み上げであるから、やはり毎日の授業をより良くするという視点からの支援も重要であることは言うまでもない。そのために必要な基本情報が得られないのであれば、JFLLCなりのGCSE準拠日本語シラバス・カリキュラムを持つことも必要ではないかと思われた。

3. 問題の解決に向けた方策

前章ではGCSE日本語のカリキュラムと教材は各校で教師が独自に調整しなければならないということ、そのカリキュラムと教材により各校で多様な実践が行われるため、JFLLCにとっては支援内容の特定がしにくいということを指摘した。この状況に対応するためには、教師がだれでも閲覧・使用できる日本語コースの方法を示した参照資料を提案することが必要であると考えた。そのために、次のような方策を立て、日本語リソース開発プロジェクトを計画した。

① カリキュラム及び教材作成の土台となる教師用資料を作成し、参考に供すること

カリキュラム及び教材作成の参考資料としては、文法・文型を組み合わせ、配列した学習項目表(シラバス)をトピック別に作成する。その基礎資料として、GCSE試験シラバスのうち、文法・文型項目を難度や導入順序を勘案して配列し直したもの(文型表)、語彙リストにトピック及び概念別指標を加えたもの(トピック別語彙リスト)なども作成する。

② 上記資料をもとに、教材を作成し、日本語指導方法の一案として参考に供すること

上記教師用基礎資料をもとに、実際に教材を作成する。教材は主な教室活動の流れ(導入 基本練習 応用練習)を想定した構成にする。また、コンピュータを使って学習できるようにICT教材も含めることにする。教材はシラバス上、全体で3トピック、60サブトピックのモジュールから成るが、その中で、基本となる30サブトピック分について作成する。残りの30サブトピックについては、将来教材作成グループを立ち上げ、作業を進めていくことを想定する。

これが教師研修の機会にもなり、かつ、日本語教育関係者のあらたなネットワーク構築の機会になる可能性も期待できる。また、公開した教材を利用して、研修会を開催することも可能になる。

③ ①②の作成物をウェブサイトで公開すること

ウェブサイトによる教材や資料の公開は、JFLLCの研修会に参加したり図書館を利用することが難しい教師に対する支援をも可能にする。同時にJFLLCとしては、これまで投稿に依存していたウェブサイトの教材セクションを自主制作教材の発信の場として積極的に活用し、質量両面での充実を図ることができる。また、ハードコピーの教材と違い、電子ファイルの更新がしやすく教材を提供する側としては好都合である。

JFLLCには、「GCSEの良い教科書はないか」という問い合わせがよくある。教師たちの教科書を望む声は確かに大きいですが、それを自分たちで作ろうという動きにまで発展させることは、今までなかった。一方、JFLLCは英国の国家資格試験用の教科書を独自に作る立場にはない。したがって開発するものは、教科書ではない。また試験対策本でもない。JFLLCにとっての課題は、GCSEという特定の試験に対する支援ではなく、日々の日本語授業を支援するための教材や資料を拡充することである。先生方の個々の授業に応じて、日本語授業をより良くするための方策を提案することが重要なのである。

また、JFLLCの提案である以上、JFの独自性をもたせることを念頭においた。『日本語能力試験出題基準』、『教科書をつくろう』、『写真パネルバンク』やイラストなど「みんなの教材サイト」からダウンロード可能な素材など、JFの日本語教育の蓄積を参照することにした。

4 . 日本語リソース「力 CHIKARA 」開発プロジェクト 作業の経緯

日本語教師がだれでも共有できる参照用資料、教材を開発することを目的として、日本語リソース開発プロジェクトを進めた。リソースの名称は「力 CHIKARA 」とした。なおここでは、教材と資料など日本語指導に関する成果のすべてを、リソースと呼ぶことにする。

実際に作業にあたったのは、主に専門家とジュニア専門家⁸⁾の二人であるが、例えば録音作業をする場合などは必要に応じて、協力者を得た。

GCSE日本語には5つの大きなトピックがあるが、開発第1期ではそのうち3つのトピックについて、シラバスと、文型練習・コミュニケーション練習を中心とした教材を開発し、第2期で残る2つのトピックを読解練習を中心とした教材にする計画を立てた。

開発作業の進捗状況は以下の通りである。

2005年第3 四半期には、教材開発で使用する教材編集用ソフトウェア等を比較検討し、その使い方を開発担当者が自己研修する期間とした。これに続いて、同年第4 四半期は、プロジェ

表2 日本語リソース開発プロジェクトの作業進捗状況

開発 第1期	2005年第3 四半期 準備期間(ICTトレーニング) 2005年第4 四半期 カリキュラム(SOW) 実態調査、教科書調査、シラバス作成(2トピック「わたし」「学校」) 2006年第1 四半期 2トピック分の教材作成(ICT除く) 2006年第2 四半期 研修会で教材試用 修正、ICT教材作成着手 2006年第3 四半期 ICT教材作成、2トピック分完成 2006年第4 四半期 ホームページで「わたし」「学校」のリソース公開 3つ目のトピック「町」のシラバスと教材作成 2007年第1 四半期 ホームページで「町」のリソース公開
開発 第2期	2007年第2 四半期 力(読解用) 準備期間 2007年第3 四半期 力(読解用) シラバス、教材作成中 2007年第4 四半期 力(読解用) ホームページでリソース公開(予定)

クト作業の事前調査にあてた。具体的には、トピックと文型の組み合わせや配列を調べるために、各校で参考にされている豪州の日本語教科書を調査したり、入手可能な範囲で各校のSOW(Scheme of Work) と呼ばれるカリキュラムを調査したりした。その後、「わたし・家族・家での生活」(以下「わたし」)、「学校生活」(以下「学校」)という2つのトピックについてシラバスを作成した。

2006年度第1 四半期に入ってから、7月の中等教師向け日本語研修会Refresher Courseで試用することを目標に、2トピック分の教材作成にあたった。ただし、ICT教材は手順として後にまわすため、ここでは、ハードコピーの教材3種(モデルテキスト、文型練習、コミュニケーション練習)と音声教材だけに取り組んだ。音声録音は、音声編集フリーソフトAudacityをコンピュータにインストールし、事務所会議室で行った。第2 四半期には、研修会で教材を試用、その後、修正・改良を加えて仕上げていった。ハードコピー教材の学習項目が一通り確定したところで、第3 四半期にはICT教材の作成に着手した。教材編集用ソフトHot Potatoesを購入、使用して、文型練習と会話練習の補助教材を作成した。こうして、2つのトピックの教材が一応完成し、第4 四半期にはJFLLCのウェブサイト上の専用ページから配信を開始した。ウェブ上の記事の掲載は従来どおり外部業者に作業依頼をしたが、教材リソース各ファイルのアップロードについては、ファイル数が各トピック100以上ある上、公開後も修正、再掲載を繰り返すことが予想されたのでCMS(Content Management System) を購入、事務所スタッフが自分で作業ができるようにした。同時に、3つ目のトピック「町と社会生活」(以下「町」)のシラバスを作成し、その後同様の手順で教材を作成した。「町」は2007年第1 四半期に公開した。こうして、予定した3つのトピックの初級日本語教材が完成した。なお、このプロジェクトは、グレイトブリテン・ササカワ財団の助成金を受けた。

5. 「力 CHIKARA 」リソースの構成・内容・特徴

リソースの全体構成

「力 CHIKARA 」リソースは、教材を含む以下の3つの部分で構成されている。

- ① GCSE参考資料：GCSE文型リストJFLLC版、GCSE語彙リストJFLLC版
 - ② 「力 CHIKARA 」シラバス(学習項目表):「わたし」「学校」「町」の3種
 - ③ 「力 CHIKARA 」教材:「わたし」「学校」「町」合計33サブトピック分
- 以下、各々のリソースの特徴を簡単に述べる。

5.2 GCSE参考資料

教師用のGCSE参考資料は、試験方法と内容の目安が記載してある *Edexcel GCSE Japanese Specification* (2000) をもとにして、教師が利用しやすい形にJFLLCが作成したものである。GCSE参考資料には文型リストと語彙リストがある。

5.2.1 GCSE日本語文型リストJFLLC版

GCSE日本語の試験シラバス (*Edexcel GCSE Japanese Specification*) は *Grammar List* として、文法の項目を記載している。それは、文法書の目次のような形式にも見える。日本語を教える者にとっては、むしろ文型の形でリストになっているほうが使いやすいように思われたこと、さらに、特に本プロジェクトにおいては、シラバス作成の基本情報として文型の難度を付加する必要があったことから、JFLLC版文型リストを作成することにした。試験シラバスでは語彙リストに単語として記載されている文型項目(例 あげます、もらいます)を拾いあげたり、文型にはすべて例文を付け加えたりして、リストを整えた。

文型の難度は、以下のようにA、B、Cの3つのレベルに分類することにした。この分類は、日本語能力試験のシラバスや、GCEシラバスとの重なりを参考にして行った。

- ・ Aレベル：もっとも基本的なレベル(日本語能力試験4級)
- ・ Bレベル：基本的なレベル(日本語能力試験4級～3級)
- ・ Cレベル：やや難しいレベル(日本語能力試験3級以上。GCEシラバスにもある項目。)

このようなGCSE日本語の難度付文型リストが公開されたのは、おそらくこれが初めてである。

5.2.2 GCSE日本語語彙リスト

Edexcel GCSE Japanese Specification の語彙リストに情報を付加したり、再構成したりして以下のような語彙リストを作成した。

- ・ 語いリストA(あいうえお順): 従来の語彙リストに品詞情報を加えたもの。
- ・ 語いリストB(品詞別): 品詞別に語をまとめたもの。練習問題やテストを作成する際に参考資料として使うことができる。

- ・語いリスト(トピック別): GCSEの5つのトピックごとに語をまとめたもの。指導する語を確認したり選択したりといった授業準備に使うことができる。

GCSE語いリストが電子ファイルで共有されるのも、これが初めてかと思う。PDFのみならず、教師が自分で編集できるようにエクセル文書ファイルもダウンロードできるようにした。

5.3 「力 CHIKARA」シラバス

GCSE試験シラバスのトピックからサブトピックを設定し、文型を組み合わせ、配列するなどして、「わたし・家族・家での生活」、「学校生活」、「町と社会生活」の3トピックについて、トピック別シラバス(学習項目表)を作成した⁽⁹⁾。各トピックに約20のサブトピックがあり、サブトピックごとに文型、モデルテキスト、語い、学習目標を記載した。モデルテキストと学習目標は、独自に作成したものである。これら3つのトピックには、「GCSE文型リスト JFLLC版」の文型難度の基準で、もっとも基本的な文型(Aレベル)と基本的な文型(Bレベル)のほとんどが組み込まれている。また、文型は、基本的に易しいものから難しいものへと配列されている。いくつかの例外はあるが、全体的にはシラバス表の前半にはAレベルの文型が、後半にはBレベルの文型が多く使われている。さらに、どのトピックも同じ文型で構成されているので、必要に応じて、異なる3つのトピックで同一文型を学ぶことが可能である。

「力 CHIKARA」のシラバスの主な使用目的は、以下の通りである。

- ・「力 CHIKARA」教材リソースの学習内容の確認に使う。
- ・日本語の教材を自分で作る際の参考資料として使う。
- ・日本語授業のカリキュラムを作る際の参考資料として使う。
- ・同じ文型を別のトピックで指導したり教材を作成したりする場合の参考資料として使う。

5.4 「力 CHIKARA」教材について

5.4.1 トピック

「力 CHIKARA」シラバス各トピックの約半数のサブトピックを教材化し、JFLLCのウェブサイトで閲覧およびダウンロードができるようにした。半数と言っても、GCSE文型のうち特に基本的なものはほとんど含まれるように選択してある。この教材は、文型をきちんと学び、それをコミュニケーションな場面で使う練習ができるように作成した。

「力 CHIKARA」教材のトピックは、GCSEのトピックと表3のように対応している。

5.4.2 教材の内容・構成

各サブトピックには、いろいろな種類の教材が用意されている(表4参照)。これらの教材の作成にあたっては、国際交流基金の中等教育向け素材集『教科書を作ろう』や「みんなの教材サイト」を参考にした。教材に付したイラストや写真は、すべて同サイトの素材集を利用し

英国中等教育向け日本語リソース開発プロジェクト

表3 カリソースのトピック・学習目的・文型レベル

「力」のトピック名	GCSEトピック	学習目的	文型レベル*
わたし・家族・家での生活 Myself, Family & Home life	House, home & daily life	日本語の文型・文法練習 コミュニケーションのために 日本語を使う練習	A～Bレベル 及び Cレベル (一部)
学校生活 School Life & Routines	Education, training & employment		
町・社会生活 Town & Social Life	Social activities, fitness & health		
(2007/8 開発中)	Media, entertainment & youth culture	日本語の文型・文法練習 読解練習	A～Cレベル
	In the UK & abroad	日本事情・文化の知識	

文型レベル*は「GCSE文型リストJFLLC版」による。(A:もっとも基本的 B:基本的 C:やや難しい)

表4 「力 CHIKARA」教材の内容と目的/使い方

教材		内容	使用目的/使い方
モデルテキスト		モノログ:書き方のモデル ダイアログ:会話のモデル 音声ファイルあり	サブトピックの会話と文型を導入する 聴解練習のスク립トとして使用する
練習1 (文型練習)	ワークシート	文型・文法の練習問題	日本語の文型を正しく理解する 授業や宿題として使用する
	ICT	活用練習 語順練習 文法クイズ 単語クイズ 編集ツール: Hot Potatoes	文型・文法の基本を練習する 練習1(ワークシート)の予習 や復習として補完的に使用する
練習2 (コミュニケーション練習)	ワークシート	「話す」「書く」コミュニカティブな活動 ペア/グループ/各自で活動するためのワークシート 指示の文は英語	日本語をコミュニカティブな場面、状況で話すことや書くことを練習する 教師の指示のもと、授業で使用する
	ICT	会話文再構成(並び替え) 編集ツール: Hot Potatoes	練習2(ワークシート)の準備として、補完的に使用する
音声		モデルテキスト1 (モノログ)1回録音 モデルテキスト2 (ダイアログ)2回録音	モデルテキストを聞く モデルテキストの練習をする 聴解練習をする

た。ICT教材は、ビクトリア大学(カナダ)のチームが開発したソフトウェアHot Potatoesを使用した。

教材はかな、漢字またはルビ付漢字を使用している。漢字はGCSE日本語の出題範囲にあるものである。

また、すでに述べたように、「力 CHIKARA」の教材は、文型ができるだけ易から難へ配列されるように考慮してある。したがって、サブピックの番号順に指導すれば、段階的な文型指導が可能である。しかし、数は少ないが、文型とサブピックの内容の関連性が特に強い場合は、B/Cレベルであっても早めに配置されているものもある。

さらに「力 CHIKARA」は、上の表のように各サブピックが①モデルテキスト、②練習1(文型練習)、③練習1のICT教材、④練習2(コミュニケーション練習)、⑤練習2のICT教材、⑥音声、の6種類の教材で構成されている。これらは表5に示すように、初級日本語の授業の流れ(国際交流基金2007)にしたがって使用できるようになっている。

表5 教材と授業の流れの対応

授業の流れ	使用する教材
導入	モデルテキスト(+音声)
基本練習(言語項目の確認)	練習1(ワークシート+ICTの補完的使用)
応用練習(言語運用練習)	練習2(ワークシート+ICTの補完的使用)

6. 「力 CHIKARA」の今後

6.1 教師研修会の実施

「力 CHIKARA」プロジェクト第1期で3トピック分を開発し公開した後、6月末には、制作発表をかねた第1回目のセミナー・ワークショップを開催した。これに続き、教師研修会を以下のように企画している。

- ・第1回 6月 「力 CHIKARA」制作発表および内容・構成・使い方の紹介
- ・第2回 10月 指導法：授業の流れと「力 CHIKARA」の効果的な使い方
- ・第3回 12月 教材作成1：「力 CHIKARA」教材リソースを加工する
- ・第4回 2月 教材作成2：「力 CHIKARA」シラバスから教材をつくる

研修会は大きく分けて、指導法と教材作成の二つの目的で企画ができると思う。上記4回の内容はどれも入門概論的なものだが、その後は、さらにテーマを拡大あるいは細分化して研修会を続けていけるだろう。先述の通り、「力 CHIKARA」の教材リソースは、シラバス記載分の約半数のサブピックを教材化したものである。残る半数については、教材作成研修会を発展させて、教師による教材作成グループを立ち上げ、続けて作り上げていくことを考えて

いる。

6.2 ウェブサイト以外の媒体による頒布

カリソースはCDにして、頒布する。各教師が自分で教材を編集しやすいようにウェブには掲載していない文書ファイルもCDには入れる予定である。また、リソースのハードコピーを冊子体にしたものを試しに作ってみたところ、手軽にリソース全体を見ることができると好評であったので、実費頒布することを検討している。なお、ロンドン事務所図書館では、冊子体を閲覧・貸し出しに供している。

6.3 「力 CHIKARA」の続編

開発第1期に続いて、現在、残るGCSE2つのトピックを教材化している。文型は難度がいちばん上のC項目を入れて、日本事情・日本文化をテーマにした読解教材を作成することになっている。2007年度末までに作業終了の予定である。

7. おわりに

以上、英国の中等教育における日本語教育を支援するためのリソース開発プロジェクトについて報告してきた。教育実践の典型が把握しにくく支援内容に制約があった状況を変えるために、まずJFLLCが自ら参照枠組みを設定した。そして、それをもとに様々な教材を作成、提供し、さらに研修会を開催するという事業展開を試みているところである。

日本語教育の関係者の間では、たくさんの教材を無料で自由にダウンロードできることに對する大きな反響があるが、それだけでなく、教材が体系的に提示されているという印象が持たれているようである。第1回ワークショップの参加者へのアンケートでは、「力 CHIKARA」をぜひ使ってみたいという声を全員からいただくことができた。さらに、英国外の中等教育の日本語教師の方々からも、強い関心を示していただいている。

今後、「力 CHIKARA」リソースが日本語授業をより楽しく効果的にするために利用されていくこと、研修会の実施を含むフォローアップ活動を通して、教師間の交流の場がさらに増え、ネットワークが強まることを願っている。

〔注〕

(1)「ロンドン日本語センター」は外部向け呼称。

(2)古川・藤長(2007)、ブッサバー他(2005)、国際交流基金業務実績報告書 参照。

(3)英国では初等教育が1年生(5/6歳)~6年生(10/11歳)、中等教育が7年生(11/12歳)~11年生(15/

16歳)となっている。国際交流基金の機関調査等では、大学予備教育課程⁶⁾ Form College 12 13年生(16/17~17/18歳)も中等教育に分類されている。

(⁴)通常第1外国語としてEU言語を、第2外国語として非EU言語を学習することが多い。

(⁵)GCEはGCSEの次の段階の資格試験で、大学入学選抜のために必要である。

(⁶)「まど」は経費節減のため2005年度末で廃刊になった。

(⁷)JF本部派遣日本語教育専門家、ジュニア専門家は、ロンドン事務所の日本語アドバイザーとして、現地採用アドバイザーとともに、業務に携わっている。

(⁸)日本語教育派遣専門家は来嶋洋美(2005年2月~2008年2月)、ジュニア専門家は田中真寿美(2005年4月~2007年4月)。

(⁹)「力 CHIKARA」シラバスについては来嶋(2008)に詳細を述べている。

〔参考文献〕

来嶋洋美(2008)「試験シラバスから教材シラバスをつくる GCSE日本語リソース「力 CHIKARA」のシラバス開発」『ヨーロッパ日本語教育』12、(掲載予定)

国際交流基金・日本国際教育協会(1994)『日本語能力試験出題基準』凡人社

国際交流基金(2002)『教科書を作ろう れんしゅうへん1・2/せつめいへん』

国際交流基金(2003)『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2003年』凡人社

国際交流基金(2007)『初級を教える』ひつじ書房

ブッサパー・バンチョンマニー、今枝亜紀、プラパー・セーントーンスック(2005)「タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、147-157

古川嘉子、藤長かおる、(2007)「インドネシアの中等教育向け日本語教材作成プロジェクト」『国際交流基金日本語教育紀要』3号、45-62

Edexcel(2000) *Edexcel GCSE Japanese Specification*

国際交流基金ロンドン事務所日本語センターホームページ

<http://www.jpff.org.uk/language/index.php> 2007年10月1日参照

国際交流基金ロンドン事務所日本語センター カリソースのページ

http://www.jpff.org.uk/language/teaching_chikara.php 2007年10月1日参照

「みんなの教材サイト」 <http://www.jpff.go.jp/kyozai/> 2007年10月1日参照

Hot Potatoes (Half Baked Software Inc./University of Victoria Humanities and Computing and Media Centre) <http://hotpot.uvic.ca/> 2007年10月1日参照

国際交流基金業務実績報告書 平成18(2006)年度

http://www.jpff.go.jp/j/about_j/business/br/2006/index.html 2007年10月1日参照